

人文社会学におけるレトリック批評

畑 山 浩 昭

キーワード： 言語，コミュニケーション，レトリック，ディスコース，批評

はじめに

私は1992年の夏から1997年の春まで、米国ノースカロライナ州立大学大学院で学んだ。English Department（英語英米文学部、以下、イングリッシュデパートメントと表記する）に所属し、レトリック学を専攻した。イングリッシュデパートメントは、米国のほとんどの大学に設置してある学部で、主に、英語学、英米文学を教育研究する使命を請け負っている。私が通ったふたつの州立大学でも、イングリッシュデパートメントの建物、教授陣の質と数、カリキュラム等、どれをとっても存在感のある学部であった。

ところが、英語英米文学を専攻する学生が多いという訳ではなかった。むしろ、英語学や英米文学を専攻する学生を増やすための広告を出していた。当時の教授陣たちが口にしていたのは、「アメリカ社会における実学としてのアピールに弱い文学は、イングリッシュデパートメントの数に比例するほど、人気があるわけではない」ということであった。

このアンバランスな需要と供給の関係が維持されていたことには理由がある。それは、イングリッシュデパートメントに対する大学の教育的期待であった。具体的には、異なる専攻を持つ様々な学生に、本を批評的に読んだり、文章を説得的に書いたりできるようにするための実践的なスキルを教える事であった。イングリッシュデパートメントは、当然、英語学、英米文学、あるいは批評やレトリックを学部の専門科目として教える。しかし大学は、スキルとしての文章読解や言語運用能力の全学的な教育を、イングリッシュデパートメントに任せるという政策をとっていたのである。つまり、英語学、英米文学を専攻する学生数は少なくとも、異なる学部の学生に読解やライティングを教える使命がある事で、イングリッシュデパートメントが経済的、行政的に、成立していたのである。

しかし、英語学・英米文学の研究者達は、大学が考える読み書き能力の育成について、異なる考え方を持っていた。基礎スキルが、例えば、レポートの書き方であるとか、本の読み方といった、技術的な事柄を指すのであれば、それを教えるのが、必ずしも英語学や英米文学の専門家でなくてもよろしいといった見解であった。結局は、全学に提供する英語の読み書きを教える授業を、イングリッシュデパートメントのアシスタントプロフェッサーやインストラクター、あるいは、大学院生が担当することになった。正規のプロフェッサー達は、フレッシュマンライティングについては、あまり手を出さなかった。彼らは、

英語学や英米文学、批評、レトリックなどの科目を担当し、大学院レベルの講義も担当していたので、スキルとしての読み書き教育、専門としての英語学や文学、レトリックという分割的な位置づけがなされた。

ところが、スキルとしての読み書きが、そんなに単純ではないことが明らかになり、その後、様々な議論が起こる事になった。たとえば、「読み」という行為を行う場合、クリティカルに読む事が要求され、学生には、読んだ結果としての自分なりの解釈の要求される。時にはクラスディスカッションで、時にはレポートで、自分の解釈を表明する。クリティカルに読んで解釈を試みるためには、読者に様々な読みの基準が備わっていることが要求される。例えばそれは、文学的な概念や歴史の知識、社会文化的な知識であったりする。また、解釈のためのアプローチも必要であり、そのためには、理論を学ばなければならない。テキストひとつを解釈するにしても、作家の生い立ちを調べる、作家の表現の特徴を分析する、テキストが産出された時代背景を調べる、テキスト内の統一性を分析するなど、多様なアプローチが存在するからである。

書く事についても、様々な問題がおこった。「書き方」に関するルールの体系そのものが、文化的に偏った基準であるといった批判があったり、作者そのものの表現力や背景等を考慮すると、書き方を教えることはむしろ有害で、表現力をそこなうといった議論も出たりして、統一的な指導が難しい事が明らかになってきた。特に、説得的に書く力が要求される場合、その目的やオーディエンスを考慮した書き方が要求され、一般的なスキルとしてのライティングという位置づけだけでは太刀打ちできないことが、教える側にも教わる側にもわかってきたのである。

以上は、筆者の個人的な経験を紹介しただけであるが、拙論では、この経験からもう一步踏み出して、「読み書きはスキルではなく、読んだり書いたりする実践とその継続自体が、実は人文社会学そのものであること」を主張する。当然、読み書きをスキルとして切り離す事を問題視する立場をとる。最近の欧米におけるレトリック批評の動向と関連づけながらこの問題を考察し、「読み書き＝レトリック」として定義し、「それによる批評の実践と継続（レトリック批評）による人文社会学の新たな位置づけ」を試みようとするものである。まず、(1)レトリック批評が近代の欧米社会で見直されている理由を整理する。そして、(2)人文社会学におけるレトリック批評は、レトリックとしての読み書きを通して、批評を実践し、継続すること自体に意義があることを主張する。

1. 脚光を浴びるレトリック批評

1. 1 レトリック批評とは

レトリック批評は、英語での一般的な表記が、Rhetorical Criticism となっており、「レ

トリック理論を応用した批評の手法と実践」として理解されている。「批評」の一般的な定義は、「事物の善悪、優劣、是非などについて考え、評価すること」である。¹文学における批評も、作家や作品、背景となる社会や文化の批評を行うが、基本的にはこの定義からおおきくはずれる事はない。社会科学や、科学としての人文学では、テキストや現象の中から「真実や事実と言えることを発見し、記述する」という活動が、批評とされ、作品や人物の評価を伴わないこともある。いずれにしても、人文社会学において、研究対象が何であれ、真理としての正しい判断や評価を追及することが、批評の基本であるといえる。

一方、レトリックの基本的な研究対象は、多様なディスコースが産出する説得性である。テキストやディスコースがオーディエンスに与える心理的、社会的、行動的影響の仕組みを研究する学際的の学問であり、コミュニケーション科学の中でのひとつの位置づけは、「人間のコミュニケーション経験と行動を解明すること」とされている。²人間が言語をはじめとする、さまざまな記号体系を利用して、コミュニケーション活動を行う際、どのように記号を使用して、その意味のもとにどのような効果を産出し、説得性を伴った力やリアリティーを創り出しているかといったことが、レトリックの関心事である。

このようにして、「批評」と「レトリック」の定義をふまえると、「レトリック批評」とは、説得的なディスコースによる人間の様々な判断（ここでの「判断」は、知識や思考、行動を含む、総括的な意味）を、レトリックの立場から分析し、批評することである。言い換えると、知識や思考、行動を、説得的ディスコースの結果として捉え、レトリックとして批評することにより、より真理に近づこうとする行為である。人間が下した判断や行動のプロセスを、説明することができなければならない。それは例えば、ディスコースに隠されているイデオロギーや思想を抜き出し、現実感を伴って人々に影響を与えている仕組みを解明し、評価する、あるいは、記述するといった活動になる。³これにより、その判断を等身大で捉え、より妥当なものにする手続きを行う事ができる。

フォス (Sonja K. Foss) は、レトリック批評を次のように説明している。

レトリック批評とは、レトリックのプロセスを理解することを目的として、象徴的な行為や物事を体系的に研究、説明することである。この定義はみつつの基本的な側面を持つ。1) 体系的分析であること、2) シンボルが分析の対象となっていること、3) レトリカルなプロセスの理解を目的としていること (6-7. 筆者訳)

ここで最も脚光を浴びている概念は、「シンボル」である。言語、その他の記号を使用しての象徴的行為が、研究対象となっている。ことばは最も体系的なシンボルであると言えるが、他にも絵や写真、ジェスチャーやポスチャー、表情などの非言語的象徴体系もある。

このような記号のレトリック的使用（説得的使用，他者になんらかの影響を与えるための使用）によって産出される説得性のプロセスを，研究対象としていることになる．

フォスの定義で重要な事は，シンボルの戦略的使用が説得性を持つという事であり，それを見抜かなければ，現実から離れた判断をしてしまう可能性があるということである．現実の世界と，ことば使用したテキストやディスコースにより表象されている世界を，きちんと把握することが大事であり，ことばが現実や現象の意味をそのまま写し出している訳ではなく，ことばの運用こそが現実を作り出し，意味づけ，私たちの判断や行動に影響を与えているということが，批評の前提になっている．このようなレトリックの特徴を理解した上で，さまざまなディスコースを分析することにより，その中に発見できる思想や価値観，考え方の前提，意見，主張などを，適切に把握しようとする活動が，フォスの提案しているレトリック批評であると考えられる．

1. 2 なぜ「レトリック批評」なのか

レトリック批評が，様々な学問領域から注目されるのは，急速に科学技術が発達しているとされる現代文明社会の実情を考えると，それほど不思議な事ではない．自然科学の各分野で，新たな発見や技術が報告されると，驚きや賞賛を集める一方で，その使用や実践についての倫理を問うような議論も必ずといっていいほどおこる．原子力発電や DNA 技術，さらには，新しい医療薬品などは賛否両論を発生させる典型的な対象で，その使用についての議論がいつもメディアを通して大衆に問われる．このような科学による新しい知識や技術が，社会にどのように受け入れられていくかは，それについて語られるディスコースに左右される．ディスコースそのものに注目するのも当然である．

というのも，ある物事が，説得的な力をもったコミュニケーションによって語られる時，それ自体が人間社会に受け入れられる方向性まで決めるといっても過言ではないからである．例えば，ある集団が，多くの人々を殺傷する能力を持った武器を所持しているとする．そのような武器の所持は，そのままで社会的に容認されるわけではない．その所持を正当化する説得的なディスコースがなければ，所持しているという状態は維持されない．「人間を殺傷する武器」自体は人々にとって恐ろしいものであるので，できるだけそのような武器は望まないのが普通であろう．しかし，「現在の不安定な治安情勢からあなたを守るために，私達は今ここでこの武器を所持しているのです」といったディスコースにより，社会の中にそのような武器を受け入れる隙間を作ることができるのである．実際にはそんなに単純なことではないが，ディスコースがそのような武器の所持の是非について，決定的な効果を産出できることについては間違いない．

同じように，科学技術による様々な発見や新しい技術は，レトリカルディスコースによりその処遇を左右される．ややもすると，新しい発見や技術が，ある人々の私的思惑だけ

により、語られる場合もあるので、当然、そのディスコースの中に見いだせるイデオロギーや思想を発見すべく、レトリック批評が注目されるのである。物事の判断、つまり、批評をする際に、イデオロギーや思想をコントロールするレトリックが、どのようにかわっているか、作用しているかを確かめる事が、より公平かつ健全な判断につながるからである。この判断をより妥当にすることも、レトリック批評に与えられた使命のひとつである。

1. 3 残された疑問と新しいレトリック

しかし、レトリック批評が近年、様々な分野から注目を浴びているという現象を考える時、上述の理由だけでは説明できない。まず、新しい物事とそれについてレトリカルに、あるいは、批評的に語るという実践は、現代に限ったことではなく、むしろ、文化文明の発達とともに、いつの時代にもあったはずである。いつの時代にも、その当時の人々にとって新しい発見や技術があり、それについてのレトリカルディスコースが交換され、社会の一部となるための人々の批評を通した「判断」があった結果として、歴史があるからである。レトリックは批評が衰退するはずもなく、常に、どのような分野においても、脚光をあびてきたはずである。

ところが、レトリックは一度、衰退しているし、批評は、例えば大学の人文研究においては、人文学部の、大学院以上のレベルの研究室の中だけの活動として追いやられてきた。そういった状況は、「レトリカルに語ること、批評的に語ること」を重要としない思想が背景になれば起こりえない。先走った科学技術のために人類、社会に不幸がおこり、自省として、「やはり何事も批評をしながら適切に判断し、新しい物事に対処していくべきだ」といった思想がおこって、レトリックや批評が見直されていると考えられるかもしれない。しかし、現代においてレトリック批評が注目される理由は、それだけではない。レトリック批評という新しい実践の中の「レトリック」は、旧来のものとは異なる性質を持っている。

かつてプラトンは、レトリックを非難するために強烈なレトリックを使った。ことばの表現に確固たる自信を持っていたモダニズムも、批評家達のことばによる驚異的な説得力により崩壊し、構造主義、脱構造主義等を経て、ポストモダニズムへと変化した。つまり、「自身の持つ強力なパワーにより自身を滅ぼす」というプロセスが、歴史の中で繰り返されているのである。レトリック批評が見直されているのは、すべての学問が、それ自身に含有するレトリック性に気づいたからである。知識や理論は、強力な説得性を伴ったレトリックであるという考え方が、受け入れられるようになり、レトリックを知ることが、自分達の学問を知ることと理解されるようになったのである。レトリック（理論）によるレトリック（ディスコース＝知識や思考、判断などのことばによる形）の批評が、新しいレ

トリックである。

したがって、失墜した言語の信頼性、あるいはその言語による様々な命題や前提が原因となって確固たる基盤を失った様々な学問が、「ことばとディスコースによって成り立っている知識や思想の体系を、きちんと分析、判断できる手法」を、求めているのである。つまり、様々な学問は、その知識や理論の体系を構築しているレトリック性に興味を持っているのである。いわば、レトリックによるレトリック（ここでは、レトリカルディスコース＝知識や思想の体系をことばで表したもの）の批評を必要としているのである。

哲学や論理学、さらには科学が、できるだけレトリック性を排除して、純粹かつ絶対的な真理にたどり着こうとした結果、レトリックは葬られた。しかし、ことばの運用自体がレトリカルであることを認めなければならなくなったポストモダン以降の近代においては、さまざまな知識や思想に潜んでいるレトリック性を発見することにより、レトリックの実践と継続が、私達を真理に近い所まで到達させてくれると考えられるようになったのである。

1. 4 レトリックの機能

筆者は、オースティン (J. L. Austin) が、ことばによる「行為」を研究対象とする頃には、レトリックと、レトリック批評が脚光を浴びる下地はできていたものと考えている。

⁴オースティンのことばを借りると、”stating is performing an act”(74)、すなわち、文を文法概念のもと、センテンスとして捉えることも大事であるが、行為を遂行するステートメントとして捉えることにより、その意味やディスコースの研究が異なってくるという見解である。

私達の知識や思考は、センテンスの集まりではなく、ステートメントの集まりだと考える時、そこから意味の純粹性や絶対性はなくなり、言語による行為や話者の意図が含まれる主観的、状況的、一時的なコミュニケーションが生まれる。ひとつの文によって、多様な意味が産出される仕組みは、プラグマティックス（運用論または語用論）で、しばしば解説される場所である。例えば、「この部屋暑いね」と発することは、単にその部屋が暑く感じられるという身体生理的な状況の表明、あるいは、部屋が暑いという事実の言及だけではなく、「窓を開けようか」とか「冷房を入れよう」といった提案、さらに、同じ部屋にいる他者にたいしての要求としてまで、意味が派生することになる。

レトリックにしてみれば、しかし、プラグマティックな文の特徴は当然のことであった。なぜなら、話し手は、常に、オーディエンスへの行動的な影響を計画してディスコースを構築するからである。ことば通りの意味よりも、文を重ねて作ったディスコースの仕事により、レイター (Rhetor : 話し手や書き手) の物事の見方や考え方を、オーディエンスに受け入れさせ、ひとつの方向に導いていくのがレトリックの仕事であった。全体のディス

コースの中のひとつひとつの文（命題）に、ことば通りの意味とは別に、役割や行為としての意味があったのである。⁵

文による行為が、スピーチアクトという概念で説明できるなら、文を重ねてテキストとし、コンテキストとあわせたディスコースによる行為を「ディスコースアクト」と言えるかもしれない。ただ、そのような用語がないのは、それがまさしく「レトリック」あるいは「レトリカルディスコース」であるからだ。レトリックによる様々な行為を、レトリックの機能として捉えると、その多様性が見えてくる。言語による行為という考え方は、結果的にレトリックの機能、つまり、レトリックがどのような仕事をするかについて分析することについて、あらたな視点をいくつも提供する。

例えば、ハーリック（James A. Herrick）は、最近の著作の中で、レトリックの主な機能として、以下の六つを挙げている（16）。⁶

- 1) ideas are tested（アイデアを公の場で試す）
- 2) advocacy is assisted（特定の主義主張を支える）
- 3) power is distributed（特定の力を拡充する）
- 4) facts are discovered（事実真相を発見する、その関係を組み立てる）
- 5) knowledge is shaped（知識をかたどる）
- 6) communities are built（コミュニティを作る）

注：英語は原本より引用。日本語は筆者による翻訳。

この中には、学問にとって重要な関心ごとが含まれている事が一目で理解できるであろう。すなわち、「どのような意見や主張が良いのか、正しいのか」「特定の主義主張はどのようにして力を持ち得るのか」「真理とは何か、真理はどのようにして真理となり得るか」「知識はどのようにして体系かされるのか」「社会はどのようにして作られるか、維持されるか、壊れるか」など、枚挙にきりが無い。このような学問的関心ごとのすべてにレトリックが関わっているとすると、レトリックの機能を見逃すことができないのである。

2. 人文社会学におけるレトリック批評

2. 1 人と言語と社会

それでは、人文社会学にとってのレトリック批評はどのような位置にあり、どのような役割があるのか？まず、人文学の基本は、言語の本質と機能の理解である。例えば、人間が産出する多様なテキストは、言語を使う。また、人間の心理を考察する場合、言語的刺

激により心理が動く事実を考えれば、言語抜きで考察することは難しい。何より、文学にしても、心理学にしても、言語によって知識や理論が体系づけられていることを考えれば、言語そのものについて、深い理解を伴っていなければならない。つまり、言語とは何か、私達は言語で何をするのか、といった問いに、きちんと答えなければならないということである。⁷それが、それぞれの学問体系を批判的に等身大でとらえることにつながるのである。

社会学も人間の集団を基本単位としてとらえ、その習慣や制度、様式、文化等を研究対象としているので、当然、言語が、人間の社会活動の重要な要素になっていることを前提としなければならない。言語の使用と、社会的な約束事、物事の社会的な意味づけ、さらに、コミュニケーション手段としての言語等、言語と社会の関係は非常に深い。また、文学や心理学と同様、社会学においても、社会的な現象を定義したり、説明したり、あるいは論理づけたりしながら、その知識を増やすのに活躍するのは、言語である。言語を上手に利用して、その知識体系を増やし、理論を構築しているのである。

ところで、人文社会学をより信頼のおける研究にするために、人文科学や社会科学といった「言い方」がなされ、科学的な思想や手法がその研究に入るようになった。つまり、客観的事実を発見すること、その中に見られる法則を見出し体系化することなどが、研究の大きな目標とするようになった。文学の世界でも、テキストの解釈についての科学的なアプローチがとられるようになり、ニュークリティシズムの「テキストの中の統一性と自発的意味」といった考え方から、近年では、コンピュータを利用したテキスト分析も行われるようになった。⁸

これらの動きは、しかし、一見、言語の本質による不具合をカバーしているかのように思えるが、これにより発見した事実や法則などを解説するのはやはり言語によるディスコースであり、何よりも、「このような科学的手法がテキストの正しい解釈に導く」といった、解釈以前の学問的前提を作り上げ、維持し、他の思想を寄せつけず守るのも言語によるレトリカルディスコースである。人文社会学において、言語によるディスコースがいかに重要な役割を果たしているかがわかる。

2. 2 レトリックと様々な理論の関係

マロックス (Steven Mailloux) は、文学理論研究における典型的な問答を以下のように書いている。⁹

What is the purpose of literary studies as an institutionalized discipline?
To produce knowledge about literature. How can such knowledge best be
achieved? By the explication of texts. What is the goal of explication?

To discover the correct interpretation, the meaning of the text. (4)

要約すると、「文学の目的は、文学についての知識を増やすことであり、それにはテキストを分析、説明し、正しい解釈（テキストの意味）を発見することである」ということである。ところが、ここから問題が発生することを指摘している。

Once the theoretical dialogue gets this far, agreement among theorists begins to break down. How can we guarantee that critics produce correct interpretations? Formalists respond, “By focusing on the text”; intentionalists, “By discovering the author’s meaning”; reader-response critics, “By describing the ideal reader’s experience”; and so on.

つまり、「テキストの正しい解釈を導き出す」ことについては、同意できても、「どのようにして」という問いに対しては、それぞれの理論家が異なる思想を持っているわけである。フォーマリストはテキストの中に探し、インテンショナリストは作家の意図した意味を探し、リーダーリスponsクリティックは、理想とする読者の読みの中に意味を求めるのである。

この例でわかるのは、文学がテキストの正しい解釈を求めて、どこを探すべきかについての議論する際、レトリック（言語による説得的なディスコース）によって主張され、弁護され、非難され、反論され、比較され、選択され、増強されるということである。ここで問題になっているのは、解釈が正しいか間違っているかではなく、文学作品の意味はどこにあるかという前提の問いであり、確固たる命題の所存である。¹⁰この基本的なレベルで合意を得なければ、対象となっているテキストについてどのような解釈をしても、賛同を得られず、文学の知識とはならないのである。

2. 3 複数の視点

人文学にしても、社会学にしても、ひとつの目的、ひとつの前提、ひとつの方法であれば、それによるひとつの知識が得られ、知識を論理的に関係づけることにより、理論として体系化できるであろう。しかし、上述した文学テキストの解釈の例でわかるように、第一段階での本質的合意ができなければ、知識や理論というレベルに展開できず、ひとつの「視点」として理解されるにとどまることになる。ひとつの視点を知識のレベルにまで引き上げるためには、他者の賛同を得られるまで議論することであり、大衆が同意する時、知識として格上げされる。つまり、知識の提示そのものが、強力なレトリックとして作用することが条件なのである。フーコーやデリダが、しきりに言語と知識の関係を解き明か

そうしたのは、結局はレトリックの正体を暴こうとしていたことになる。

ある社会的な現象が発生し、社会問題として扱われると、様々な立場の人が、様々な観点から論じられる。それぞれの視点を表明し、論理的に説明し、感情に訴え、発信者としての信頼度を高めながら、議論する。つまり、現象はひとつしかないが、それに対する答え（見解）は数多く存在するわけである。正しい答えは、多くの人々が納得する命題でなければならない、言い換えると、レトリカルでなければならない。これは、ひとつの現象が数多くの視点によって語られ、視点の数ほどのレトリックが、それぞれの説得性を高めるために、しのぎを削りながら、できるだけ真理に近づこうとしている状態なのである。人文社会学は、常に真理の側にいられるように、このようなレトリカルディスコースを交換しつづける状態を維持しなければならない。

結論

人文学、社会学では、人、言語、社会の関係の中から、より正しい理解、より良い選択、より確かな知識を追い求めている。しかし、ことばを介して、物事を理解したり表現したりする以上、限界がある。ことばの本質を考慮すると、産出する意味や解釈が不安定であり、さらに、表現者とオーディエンスの関係がきちんと確立されてない場合のテキストには、メディアとしての絶対性はない。知識や理論が、ことばによって成り立っているとすると、テキストの意味が揺れ動くので、当然、知識や理論もぐらつくことになってしまう。だからこそ、研究者は、テキストに論理性や明快さ、整合性を最大限入れ込む努力をすることにより、説の正しさや絶対性をアピールするのである。つまり、懸命にレトリックを構築し、知識として貢献しているのである。

ここに、人文社会学とレトリックの関係を見いだすことができる。レトリックを交換する、つまり、レトリックによるお互いのレトリックの批評により、真理に近づくことができる。人間がおかれている社会状況が変化することを考えると、その時その時の見解や解釈は一時的であるので、常にディスコースをアップデートしなければならないし、ディスコース自体が説得的になるよう材料をそろえなければならない。このレトリックの実践と継続こそが、人文社会学の知識と理論を構築する一方で、レトリック批評が、行き過ぎた解釈や整合性のないディスコースの誤りを正すのである。結局は、説得的なディスコースを作り上げたり、テキストのレトリックを批評的に見抜いたり、判断したりする活動が、いわゆる学術的コンテキストにおける「読み書き」であり、読み書きの実践と継続こそが、人文社会学の知識と理論を支えているのである。

¹ Goo 辞書で定義を検索。アドレスは <http://dictionary.goo.ne.jp/>

² 日本コミュニケーション学会ホームページより部分引用。アドレスは、<http://www.caj1971.com/> 学会が参照しているオリジナルソースは、McBath, J. & Jefery, R. (1978) Defining Speech Communication. Communication Education 27,3. 81-88.

³ この定義については、Foss, Snja K. Rhetorical Criticism: Exploration & Practice. Second Edition. Waveland Press: Illinois. 1996. pp. 3~9. を参照.

⁴ J. L. Austin. "How to do things with words?" The Discourse Reader. Ed. Jaworski and Coupland. Routledge: London and New York. 1999.

⁵ ここでいう役割とは、例えば、「主張する」「サポートする」「非難する」などから、「感情に訴える」「論理性に訴える」などまでの、比較的幅広い意味を指す。

⁶ James A. Herrick. The History and Theory of Rhetoric. Allyn and Bacon: Boston. 2001. (初版は 1997 年)

⁷ この問いに答えようとした近年の図書に、田中克彦のことばとは何かがある。(ちくま新書, 2004). また、辞典としては、David Crystal. The Cambridge Encyclopedia of Language. 2nd Ed. Cambridge U Press: New York. 1997. が有名である。

⁸ Concordance という用語が一般的に利用されるようになった。用語の索引といった意味で、ひとつのテキストにどのような用語が何回使われているか、どのような文脈で使われているかなどを分析すること。例えば、Douglas Biber は多様なディスコースをコンピュータを利用した言語的特長によってジャンル分けしようと試みた。Variation across speech and writing. Cambridge U Press: New York. 1988.

⁹ Steven Mailloux. Rhetorical Power. Cornell U Press: Ithaca and London, 1989.

¹⁰ この命題について、疑問視してこなかった西洋文学の弱点を議論している本もある。Michel Meyer. Rhetoric, Language, and Reason. The Pennsylvania State U Press: Pennsylvania, 1994. この中で Meyer は、学問的疑問に答えるための調査研究は行ってきたが、「なぜそれを問うのか？」といったレトリカルなことについては、誰も問題にしてこなかったことを指摘している。つまり、問いそのものに対する問いを問題化している。